

その他の主な作家たち

【 すぎうら みんぺい 】

杉浦明平

1913（大正2）年～2001（平成13）年

渥美郡福江町（現田原市）に生まれ、旧県立四中（現時習館高校）を経て、一高在学中に歌誌「アララギ」に属し、歌人として出発した。東京帝国大学在学中に立原道造らと同人雑誌「未成年」を創刊、卒業後は原典によるイタリア・ルネサンスの研究を志した。

1945（昭和20）年以後郷里の渥美町に定住し、農業をしながら作家・評論活動を続けた。日本共産党に入党した時期があり、1955（昭和30）年から渥美町議を2期務めたり、教育委員も務めたりした。このときの経験から、新スタイルのルポルタージュ文学が生まれた。

のち作家活動に専念し、歴史小説、評論、エッセイと幅広く活動した。（『作家・小説家人名事典』より）

代表作

ノリソダ騒動記

田園組曲

ルネッサンス文学の研究

戦国乱世の文学

小説渡辺崋山

ミケランジェロの手紙

チボリーノの冒険

犬と五人の子どもたち

【 たけだ ゆきお 】

武田雪夫

1902（明治35）年～1964（昭和39）年

愛知県豊川市国府町に生まれた童話作家で、旧県立四中（現時習館高校）在学中「赤い鳥」に童謡を投稿、1919（大正8）年9月号より計5編が掲載された。『ブラツシ』は「澁漣とした感触」がありブラシが生きて動いていると北原白秋に称賛されたという。

立教大学に進んでからは童話創作を始め、おもに幼年童話に力を注いだ。戦前は、「幼年倶楽部」「少女倶楽部」「コードモノクニ」ほかに作品を発表。幼年向けの『スズメ』『ナカヨシコードモ』など、小さい生き物への愛護や、他国の子どもとの友情をテーマに、愛の心を育もうとする作品を書いた。

戦後も引き続き、多くの幼年童話を書いたが、その作品は、子どもの生活に即した身近な素材の中に、子どものやさしさ、素直さ、正しさが織り込まれている。（『日本児童文学大事典』より）

代表作

踏切ごっこ

スズメ

ナカヨシコードモ

やさしい科学のお話

思ひ出の歌時計

ぎんのこすず

たからもの

あわてろばさん

チロものがたり

【 つつい としお 】

筒井敏雄

1905（明治38）年～1983（昭和58）年

愛知県北設楽郡設楽町に生まれ、本名を七原敏雄といった。1907（明治40）年、実父が急逝したため、同村の筒井家の養子となった。

田峯尋常高等小学校卒業と同時に義兄を頼って上京し、小説家を志した。その後小山内薫に師事し創作に打ち込んだが、途中兵役でしば

らく活動を休み、1929(昭和4)年再び上京して、郷土の先輩尾崎士郎を師と仰ぐこととなった。

児童文学作品も手がけており、児童文学協会を設立、理事にも選出された。郷土を愛し、たびたび帰郷して作品の構想を練っていたといわれる。その作品『山の波紋』の中には、郷里田峯の風景を描写した一節がみられる。『作家・小説家人名事典』『ふるさとの文学』より)

代表作品

酒徒菩薩
開花一族
魔笛
白梅小梅
小サイヘイタイサン
そろそろ曾呂利さん
日本むかし噺
山の波紋
昇天太閤記

【ひなつ こうのすけ】

日夏耿之介 1890(明治23)年～1971(昭和46)年

長野県下伊那郡飯田町(現飯田市)に生まれ、本名を樋口罔登といった。飯田尋常高等小学校、飯田中学校をへて、1908(明治41)年早稲田大学在学中に西条八十らと「聖杯」を創刊して詩作を発表し、その後「転身の頌」を刊行した。

象徴詩人として活躍する一方、早稲田大学教授を務め、翻訳、評論と幅広く活動した。著書も多いが、その作品はかなり難解で読みこなすのには教養と忍耐が必要といわれた。しかし、峻嶒^{しゅんけい}な山に囲まれた信州人のせいか、決して世俗に屈しないで理想に向かって突き進むという誇り高き志の人であったという。

読売文学賞や、芸術院賞、毎日出版文化賞など数多くの賞を受賞し、飯田市民名誉市民に選ばれた。1956(昭和36)年、病をえて飯田市に居住した。現在、飯田市内にはリソ並木通りに詩碑をはじめ十数か所に文学碑が存在する。『詩歌人名事典』『信州の近代文学』より)

代表作品

転身の頌
ワイルド詩集
黒衣聖母
明治大正詩史
呪文
鷗外文学
文人画風
近代日本詩史論
明治大正の小説家
日夏耿之介全詩集

【ふじえだ しずお】

藤枝静男 1907年(明治40年)～1993年(平成5年)

静岡県志太郡藤枝町(現藤枝市)で生まれ、後に浜松市田町に住み眼科医を開業しながら執筆活動もこなした作家である。八高(現名古屋大学)時代の友人や「近代文学」の仲間たち、多くの芸術家たちと交流を深めるなかで、自らの文学理論を築き、独自の文学世界を作り上げていった。

私小説作家を自称し、『空気頭』が芸術選奨文部大臣賞^{でんしんゆうらく}、『田紳有楽』が谷崎潤一郎賞、『悲しいだけ』が野間文芸賞など受賞歴は多い。その作品は、天竜川周辺の風景が好きで、浜名湖の風物を愛し、浜松地方の風土への愛着強く独自の審美観で描かれているものが多い。『作家・小説家人名事典』より)

代表作品

空気頭
厭離穢土
田紳有楽
庭の生きものたち
悲しいだけ
みんな泡
虚懐

描かれたふるさと

井沢 純／著『僕のカンディード』

井沢純は、1925（大正 14）年東京生まれ、東京大学文学部を卒業。戦後豊橋で教員となり、豊橋東高校を最後に東京へ戻った。『僕のカンディード』は、著者が東高校の教員時代に刊行された作品である。

「終戦直後、豊橋近郊に復員して、1 年後市内の中学校に職を得てからは、毎日復興途上の町並を歩いて学校に通った。当時豊橋随一の景観は、何と言っても焼け落ちた飯田線終着駅のコンクリートの残骸であった。ことに背後に沈む陽の最後の輝きをうけて、茜色の空にそそり立つ灰色の膚を見上げる時僕はゴシック寺院に対するが如き畏敬讃嘆の念を禁じ得なかった。」

田山花袋／著『田山花袋の日本一周前編』

1871（明治 4）年栃木県邑楽郡館林町（現群馬県館林市）に生まれた。早くから漢詩文を学び、1886（明治 19）年上京してのち尾崎紅葉に入門、日本自然主義の代表的な作家となった。『日本一周』は、日本全国を描いた前篇・中篇・後篇からなる紀行文である。

「豊橋の町の気分は一体に素朴で、三河特有の風俗をいまだに存している。尾張あたりの都会の関西風になったのとは全く趣を異にしている。その証拠には昔の祭礼の風などが今でもちゃんと残っている。三河万歳は此処の附近の稲村という処が本場である。」

瀬戸内晴美／著『田村俊子』

1922（大正 11）年徳島県徳島市で生まれた。東京女子大学在学中に結婚して中国に渡ったが、北京から引揚後離婚して創作活動に入った。1956（昭和 31）年、『女子大生・曲愛玲』で新潮同人雑誌賞、1961（昭和 36）年『田村俊子』により伝記文学に新局面を開き第 1 回田村俊子賞を受けた。その中の「豊橋行」に豊橋のようすが描かれている。

「豊橋に着いた時、灯の色はすっかり夜になっていた。初めての町の駅へ夜になって降り立った時にいつでも感じる、うそうそしたわびしさが私に襲いかかってくる。」

城山三郎／著『イチかバチか』

1927（昭和2）年愛知県名古屋生まれ、本名杉浦英一。東京商科大学（現一橋大学）卒業後、愛知学芸大学（現愛知教育大学）の助手となり、後専任講師となったが、10年後退職した。この間に、『輸出』で文学界新人賞、『総会屋錦城』で直木賞受賞し、経済小説というジャンルを成立させた。

「大田原が約束した通り、二つ目の停車駅である豊橋で下りた。下りる直前、大田原はチョビひげをしごきながら、恐縮したように言った。（中略）ベルが鳴り出した。豊橋は三十秒停車である。ためらっている中に、ドアが閉まってしまう。」

夏目漱石／著『三四郎』

1867（慶応3）年、東京生まれ、本名金之助。東京帝国大学卒業後、松山市の松山中学、第五高等学校（熊本）などで教職についた。イギリス留学後、東京帝国大学で英文学の講義を始めたが、処女作『我輩は猫である』を発表し、作家活動に入る。

「浜松で二人とも申し合わせた様に弁当を食った。食ってしまったも汽車は容易に出ない。窓から見ると、西洋人が四五人列車の前を往ったり来たりしている。其のうちの一组は夫婦と見えて、暑いのに手を組み合わせている。女は上下とも真白な着物で、大変美しい。三四郎は生まれてから今日に至るまで西洋人というものを五六人しか見た事がない。」

山田風太郎／著『戦中派不戦日記』

1922（大正11）年、兵庫県養父郡関宮町で生まれ、本名は山田誠也。幼くして父母を失い、親戚の間を転々とする少年時代を送る。1944（昭和19）年東京医科歯科大学に入学し、在学中『達磨峠の殺人』が「宝石」の懸賞小説に入選して作家デビューした。本格推理ブームを生み、『甲賀忍法帖』で忍法ブームを起こした。

「九月一日（土）○午後飯田駅にゆき、切符を求め、蒲団をチッキで送り出す。剣なき兵、窓口に顔出し、「兵隊だがねえ、切符一枚売ってくれい」と、今まで通りやり、駅員にさんざんとなりつけられる。「兵隊？兵隊かなんか知らんが、まさかもう公用じゃあるまい。公用じゃなければ一般といっしょにならんでもらいたい」